

公正に個別最適化された学びに向けた標準時数の考え方

熊本市教育長 遠藤 洋路

1 予備時数の削減

(1) 予備時数削減

これまでの問題点（～H29）	改善の方向性（H30～）
予備時数の多さが問題 ・時数が多くてゆとりがない ・時数が多いがゆえの間延びした授業	委員会として予備時数の目安（20h）を明示 ・ゆとりある教育課程の編成 ・メリハリのある授業

・実際の予備時数の変化

予備時数が0～35時間の学校の割合

(H29 ⇒ R1) : 小学校 (約24%⇒約85%)、中学校 (約49%⇒約65%)

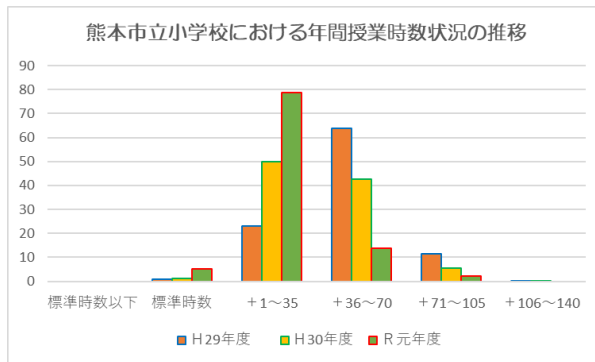


図1 小学校の予備時数の変化

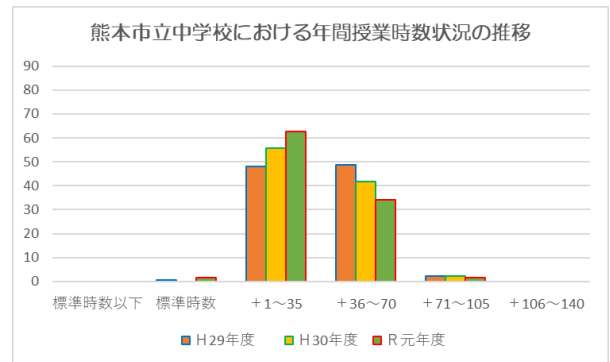


図2 中学校の予備時数の変化

(2) 予備時数削減の結果

①熊本市学力調査の結果

小学校：全ての学年、教科に伸びがみられた。中学校：ほぼ変わらず

⇒予備時数削減による負の影響は見られない。

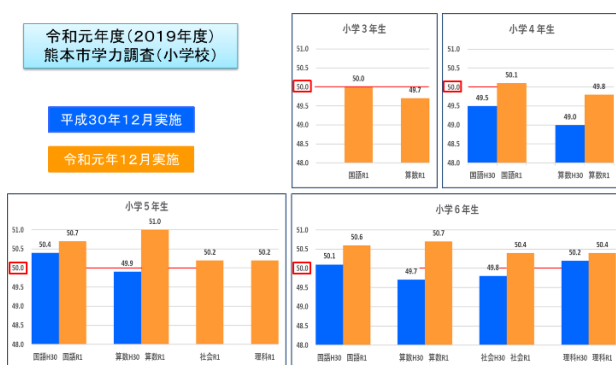


図3 小学校の結果

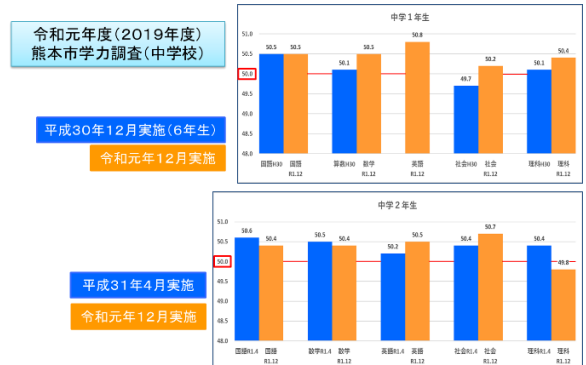


図4 中学校の結果

- ②コロナウイルスの影響により3月を臨時休校にした本年度の未指導教科数（抜粋20校）  
 小学校：約1.4教科／学年 中学校：3.8教科／学年  
 ⇒未指導内容は、ほとんどの学校が最後の単元部分であり、2月まででおおよその学習内容が終了。

以上より、予備時数を削減しても十分対応でき、学力テストの結果に影響は見られない。

## 2 ICTの活用

### (1) ICT導入の経緯と現状

- H30年度 モデル校先行導入（タブレット、電子黒板、実物投影機）  
 R2年度 全市小中学校導入完了（3人に1台程度）  
 ⇒ICT環境整備の充実

### (2) ICT活用の効果

- ①LTE タブレット端末を活用した授業改善の展開  
 ・導入段階毎の授業の変容（初期→中期→後期）  
 ・一律一斉一方向の授業から主体的・対話的な授業へ  
 ・教員研修の変化
- ②各教科等における授業時数の削減（スリム化）と探究学習の増加  
 ・教材研究、教材作成等の授業準備の短縮化  
 ・探究型学習における時短効果  
 ・校外学習における時短効果（修学旅行のまとめ）
- ③適切な個別対応（推進校先生アンケート結果）  
 7つの質問事項：成果あり80%以上：6項目／7項目

## 3 標準授業時数に関する考え方

### (1) これから求められる学びと標準授業時数の関係

標準授業時数とは…公正に個別最適化された学びの実現に必要な時間

観点	考え方
認知能力の育成	学習内容を習得するために必要な時間 ⇒個々の子どもたちには、能力の差やそれぞれのペースがあるため、習得に必要な時間にも個人差がある。
非認知能力の育成	非認知能力を育てるために必要な時間 問題を協働しながら解決していく力【GRIT：やり抜く力】 ⇒協働的な活動やGRITの育成には、ある一定の時間が必要となる。

### (2) 標準授業時数の意義

非認知能力の育成を含めた、学習に必要な時間（一定の時間の必要性）

## 4 まとめ

### (1) 各教科等における授業時数の弾力化の可能性

- ①標準授業時数の大枠は維持⇒各教科等への時数配分を弾力化  
個々の児童の実態や学校の特色に応じて、授業時数の配分を重点化
- ②小中一貫教育の特例を小中学校に活用  
独自教科（例えば、探究的な活動）の設定、指導内容の入替

### (2) ICTの効果的な活用

短時間で学習内容を習得し、授業時数を削減することができた場合、残りを探究的な活動に活用できる。